

銘傳日本語教育

第15期

目次

はしがき	銘傳日本語教育編集委員会
[寄稿論文]	
<特別講座第1講>	
日本語教育におけるバフチン言語学的視点	西口光一 1
<特別講座第2講>	
テーマ中心の基礎日本語教育—その内容と習得の原理—	西口光一 18
[研究論文]	
台湾人日本語学習者の日本語音声単語の認知に及ぼす母語の影響—中日音韻類似性の観点からの検討—	邱學瑾 21
台湾人日本語学習者の依頼の手紙における文末表現使用に関する一考察	本間美穂 46
日中両言語における方位語「東～」の認知的多義構造	蔡豐琪 71
「名詞＋動詞連用形」複合語の特徴及びその使用実態	陳世娟 96
張文環「部落の惨劇」論—首切りという行為を手がかりに	阮文雅 121
[実践・調査報告]	
日本語作文教育における文章構成指導の試み—「非構成群」との比較検討—	李宗禾 140
談話レベルでの会話教育を目指した教室活動—教科書を踏み越えた指導—	川合理恵 165
[その他]	
既刊号論文目次一覧	190
『銘傳日本語教育』執筆要項	197

2012年10月

銘傳大學

教育暨應用語文學院應用日語學系出版

台湾人日本語学習者の日本語音声単語の認知に及ぼす母語の影響—中日音韻類似性の観点からの検討—

邱學瑾

臺中科技大學應用日本語学科准教授

【要旨】

本研究は、台湾人日本語学習者の日本語音声単語の認知に及ぼす中日2言語間の音韻類似性の影響を2つの実験によって検討したものである。実験1は、プライミングパラダイムを用いた日本語の語彙判断課題であり、実験参加者に中国語音と日本語音を継時に聴覚呈示し、後続の日本語音が日本語単語であるかどうかを判断させた。また、実験2は日本語語彙判断課題であり、聴覚呈示された日本語音が単語であるかどうかを判断するように実験参加者に求めた。その結果、実験1と実験2は一致した傾向を示し、次の3点が明らかになった。

(1) 実験群の漢字熟語は統制群のカタカナ語より反応時間が長く、中国語音の干渉が生じることが明らかになった。

(2) 実験群において、中日音韻類似度が高い条件はそうでない条件より中国語音の干渉が小さいことが示された。

(3) 早く習得された単語は遅く習得された単語より中国語の干渉を比較的受けにくいことが示された。

以上の結果から、日本語漢字語彙が処理される際に、当該漢字の中国語の音韻表象も活性化し、日本語単語の認知に影響を与えることが明らかになった。また、その中国語音の影響は、単語の習得年齢及び中日の音韻類似度によって異なると考えられる。

【キーワード】台湾人日本語学習者、音声単語認知、音韻類似性、音韻プライミング、語彙判断課題

台湾人日本語学習者の依頼の手紙における 文末表現使用に関する一考察

本間美穂

銘傳大學應用日語學系講師

【要旨】

本稿では、台湾人中上級日本語学習者の依頼の手紙における文末表現の使用について考察した。日本人大学生及び日本語手紙文例集の依頼の手紙との比較から、台湾人学習者が依頼の手紙で使用した文末表現に、文体の不統一、「言いさし文」の使用、終助詞「ね」の付加などの傾向が観察された。その他、上級段階に入っても婉曲的な表現の運用能力が身に付いておらず、「のだ」の習得も遅れていると推測される結果を得た。

今後の指導への提言としては、(1)学習者に書き言葉と話し言葉の表現の違いを理解させ、使い分けを意識化させること、(2)対人配慮を適切な言語形式で表現するための十分な語用論的知識を与え、その運用能力の向上を図ること、などが重要だと思われる。

【キーワード】 依頼の手紙、文末表現、語用論的能力、文体の不統一、「のだ」の習得

日中両言語における方位語「東～」の認知的多義構造

蔡豊琪

銘傳大學應用日語學系助理教授

【要旨】

本論は認知意味論の観点で、日中両言語の方位語「東」の多義構造を中心に分析する。研究方法としては、まず方位語「東」の派生義に対する分類を検討するため、日中両言語の各辞典や文献で取り上げた用例を主な語例資料として収集する。それから方位語「東」の用例を比較しながら、実際の共時的な使用分布とその意味範疇を観察する。従って、各辞典の方位語「東」の意味項目を比較して、語源辞典の解釈をも参考しながら、基本義の意味特徴を検討する。続いて、「類似性」、「隣接性」、「包摂性」などの特徴で、基本義と派生義との間の認知的な意味関係を分析しながら、「メタファー、メトニミー、シネクドキーなどによる意味拡張」という概念で、基本義と派生義の認知的意味関係を解釈する。最後に方位語「東」の多義構造を意味ネットワーク図で、方位語「東」の多義構造をまとめる。ネットワーク図で方位語「東」の基本義と派生義との意味関係を解釈し、日本語教育上に応用すると考えられる。

【キーワード】 多義表現、意味拡張、メタファー、メトニミー、ネットワーク図

「名詞＋動詞連用形」複合語の特徴及びその使用実態

陳世娟

東呉大学日本語文学系助理教授

【要旨】

本稿では、語構成と品詞の観点から「名詞＋動詞連用形」の特徴とその使用実態について考察を行った。結果は次のようにまとめられる。

- ① 「名詞＋動詞連用形」の内部構造においては、OV型が最も多いことが明らかになっている。次いで多いのはF型、そしてSV型という順になっている。また、F型は3型のうち、最も述語としての働きを持ちやすいといえる。
- ② 形容詞的に働くものはF型の語が多いことから、日本語の形容詞的な複合名詞は、項関係ではなく意味構造に直接作用することで形成されるといえる。
- ③ 動詞的に働くものは形容詞的に働くものと異なって、OV型の語もF型の語も多く現れている。動名詞は、名詞の特徴付けの用法として目的語になると同時に、述語としても働くことができる。
- ④ 「名詞＋動詞連用形」型の語は、複数の品詞に跨っているが、やはり[名詞]に属しているものが最も多い。
- ⑤ わずかであるが、「根こそぎ、気持ち、心持ち、九分通り、頭ごなし、順繰り、表向き」のような副詞的なものもある。

【キーワード】複合名詞、語構成、項構造、LCS、品詞的カテゴリー

張文環「部落の惨劇」論—首切りという行為を手がかりに

阮文雅

東呉大学日本語文学系助理教授

【要旨】

1871年のボタン社事件以降、台湾原住民の野蛮人としてのイメージは固定化されつつあった。1930年の霧社事件が勃発した際にも、その問題性を台湾原住民の馘首の旧慣に帰結させようとする動きもあった。実際1940年代前後の文壇にも、台湾原住民の馘首を題材とした作品が増えてきたのも事実であった。大鹿卓は1935年に「野蛮人」を発表し、日本人が首切り行為をすることによって体中の野性が目覚めさせられるという筋の物語を作った。中村地平は1939年に「霧の蕃社」、1940年から1941年にかけて「長耳国漂流記」を発表したが、これらは霧社事件、ボタン社事件を各々題材にした作品である。「霧の蕃社」でも、蜂起事件の首切り行為が原住民の首狩り旧慣と混同され、蜂起事件が原住民の野蛮の血に起因したものであると捉えられている。ついで、1941年8月に、張文環が「部落の惨劇」を題目として、漢民族の首切り行為に触れた作品を発表した。台湾原住民の首切り行為をコンテクストとして介在させていると思われるこの作品は、一見すると時代の流れに順応して書かれたものであるかのように見えるのだが、話の設定も視角も日本文学者のそれとは大きく異なる。首切り行為は部落の「惨劇」としては書かれていないのである。本稿は、作品内で、結局「首切り」行為が何の「罪」にも問われなかった、ということの意味を探りつつ、作品の深層構造を明らかにしていく。

【キーワード】 張文環、部落の惨劇、首切り、台湾原住民、野蛮人

日本語作文教育における文章構成指導の試み — 「非構成群」との比較検討 —

李宗禾

東呉大学日本語文学系助理教授

【要旨】

本稿では、文章構成を踏まえた作文指導の取り組みが学習者の作文の質に与えた影響を「非構成群」との比較をしながら時間軸に沿って検討した。日本語母語話者による評価の結果を継続的に見て分析した結果、学習者の作文には以下のような質的な変容が見られた。

全体的評価では、「構成群」は「非構成群」より伸び幅が有意に高かった。「趣旨」では、介入指導を実施する前に「非構成群」の得点は「構成群」より高く、群間の有意差があった。後半期に入ると、差が縮まり、ずっと存在していた有意差がなくなった。「正確さ・言語形式」では、「初期」には同点であった両群は「後期」に入ると、「非構成群」の方が得点の向上が顕著であった。「内容」では、両群の得点が十ヶ月に渡ってもほぼ変化せず、群間の有意差もなかった。「表現力」では、得点がまったく変化がない「非構成群」に対して、「構成群」は伸びる一方であった。また、その伸び幅にも有意差が見られた。

結論として文章構成の指導は作文表現技法の向上に一定の効果が認められた。今回の研究結果によって、文章の論理構造を読む学習及びそれに基づいた文章の展開法が表現教育のために必要であることを提言したい。

【キーワード】文章構成、作文の質、意見文、作文評価、「型」の指導

談話レベルでの会話教育を目指した教室活動 －教科書を踏み越えた指導－

川合理恵

銘傳大学應用日本語學系講師

【要旨】

本稿は、筆者が初中級の『日語会話(3)(4)』において、文法シラバスの会話教科書を柱として、談話レベルの会話教育を目指し行っている教室活動について報告するものである。

談話レベルの会話教育とは、一連の流れとしてのまとまりに着目した指導であると言える。それは、対面型会話において、会話展開に関わる円滑なコミュニケーションを行う能力や描写したり筋道を追って話したりできる談話構成能力の育成を目的とした指導である。

そうした会話教育を初級レベルから実践するため、まず教科書分析の結果をもとに新たに授業に取り入れるべきシラバスを決定した。本稿では、その補充シラバスを教科書の文法シラバスと融合させる形で実施している教室活動について報告する。

【キーワード】 談話レベルでの会話教育、教室活動、円滑なコミュニケーション、談話構成能力、教科書分析

銘傳日本語教育

第 15 期

中文目錄

發刊詞

銘傳日本語教育編輯委員會

[寄稿論文]

〈特別講座第一講〉

日語教育中之 Bakhtin 語言學觀點論述 西口光一 1

〈特別講座第二講〉

以 Theme 為中心的基礎日語教育—其內容與習得原理— 西口光一 18

[研究論文]

台灣人日語學習者的母語對日語口語語詞辨識的影響

—從中日語音類似程度的觀點探討— 邱學瑾 21

台灣日語學習者在請託信中句尾表現使用狀況之探討 本間美穗 46

中日兩國語言方位詞「東～」之認知多義構造 蔡豐琪 71

「名詞+動詞連用形」複合語之特徵及其使用實態 陳世娟 96

張文環「部落的慘劇」—從割頤行為的意涵出發— 阮文雅 121

[實踐・調查報告]

日語寫作課程之文章結構教學試案

—透過與「非結構組」之比較— 李宗禾 140

以達到言談層次的會話教育為目標的教室活動

—跨越教科書的指導法— 川合理惠 165

[其 他]

過去刊號論文目錄一覽 190

《銘傳日本語教育》投稿規定 197

2012 年 10 月

銘傳大學

教育暨應用語文學院應用日語學系出版